

社会福祉協議会会長賞

堺市立 美木多中学校 三年

内野 穂花

言葉の力

私は中学二年生の頃、週に二、三回しか学校に行けない、いわゆる「不登校」だった。誰かに何かをされたなどという訳では無い。ただ少し、クラスの輪に馴染むのに出遅れた、上手くグループに入ることが出来なかっただけだ。ただ、当時の私からすればその狭いコミュニティが全てで、そこに馴染めない＝居場所が無いと言っても過言ではなかった。

しかしそんな時、「もうどうでもいい」と自暴自棄になっていた私を救ってくれたのは、同じクラスの友達だった。休んでいる理由を聞くわけでもなく、ただただ普通に喋りかけてくれる。「おはよう」と言ってくれる。「また明日」と言ってくれる。そんな何気ないごく普通の会話が、本当に嬉しかった。

誰かに必要とされていること。誰かに存在を認めてもらえること。普通の日常を過ごしていると当たり前前のことのように思っていたが、本当にどうしようもなく追い詰められた時、自分に存在意義があることを伝えてくれる誰かがいることで、人はとてつもなく救われることがあるのだと気付いた。

この中学二年生の頃の経験から私は、未成年の子供たちが犯罪や非行に走らない明るい社会をつくるには、主に二つのことが重要だと思った。

一つ目は、「挨拶」だ。当たり前のことだと思うだろうか。しかし、「挨拶」は明るい社会をつくる上で欠かせないものだと思う。友達が「おはよう」と言ってくれる。「また明日」と言ってくれる。もちろんその言葉にもたくさん救われたが、中々調子が出ず午後からの登校になった時、どこか後ろめたさを感じながら教室に入ると、いつもと変わらない様子で「あ、おはよう！」と周りのクラスメイトが声を掛けてくれることがあった。その時、私はどこか感じていた申し訳なさや後ろめたさが少しだけ軽くなるのを感じた。「挨拶は大切」と今まで何度も教わってきたが、この時ほどその言葉が身に染みたことはない。

二つ目は、誰かと会話をすることだ。人は確かに、一人で生きていくことも可能だ。しかし、自分が感じたことなどを共有できる相手や何もなくても話ができる相手がいないと、人間はストレ

スが溜まり気分が暗くなる。逆に、気分が落ち込んでいたりしても、誰かと話することで少しでも明るくなれることがある。人生百年時代。どうせ生きていくしかないのなら、楽しく生きていたい。一人一人が楽しいと思えたら、明るい社会は自然とつくれていくと思うのだ。

「未成年の子供たちが犯罪や非行に走らない明るい社会」をつくるには、誰かと顔を合わせて言葉を交わすことが何よりも大切なことだと思う。中学二年生の頃の経験を通して私が感じたのは、
「当たり前が当たり前でなくなる感覚」だ。少し前まで日常だったものが、途端に非日常になる。「存在意義」が見出せなくなる。生きる理由が見つからなくなる。その負のループを抜け出せたのもまた、誰かと言葉を交わすことだった。そばにいてくれる人がいることで、自分と目を見て話してくれる人がいることで、マイナスな考えを前向きに捉えられる時もあるのだ。

社会を今よりも少しずつ明るい明日にしていくには、どんなことよりもただただ、人と会って言葉を交わすことが一番の近道だ
と思う。

